HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	火を吐くディートリヒ : ディートリヒ・フォン・ベルン研究序説
Author(s)	寺田, 龍男
Description	正誤表あり
Citation	ノルデン, 29, 1-23
Issue Date	1992-11-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77340
Type	journal article
File Information	norden_29_1-23.pdf, 本文

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

火を吐くディートリヒ*

―ディートリヒ・フォン・ベルン研究序説―

寺田龍男

1

近年ゲルマニスティクで研究が盛んになりつつある「後期中世」は，ディートリヒ・フォン・ベルンらを中心とする「英雄文学(Heldendichtung)の時代」とも呼びうる時期だった。現存する筆写本の成立年代を見るとそれは一目瞭然である。すなわち，1200年頃から16世紀初めまでのほぼ300年間に書かれた英雄文学の写本は断片まで含めると100以上あるが，その成立年代で見るとこれらのほぼ半数は宗教改革が始まるまでの100年間に集中している。これに対し，メディエヴィスティクの主要な研究対象として確固たる地位を築き上げた観のある「宮廷小説」(höfischer Roman) ―― アルトゥース系や『トリスタン』に代表される ―― は，現存写本の総数を尺度にするならたしかに英雄文学の人気を上まわる。同じ時代区分で見ると350ないし400にのぼる写本が書かれている。しかし1400年を過ぎてから書かれたものは，全体の三分の一にも及ばないのである。[1] 英雄文学がある時期から急速に人々の関心を集め始めていわば「文字文学」化されたのに比べ，宮廷小説の方は相対的に人気が衰えていったと言える。

さらに印刷本に目を向けると，当時の受容者の嗜好・傾向は一層鮮明になる。中高ドイツ語文学の古典期(1170―1250年)に成立した作品が，印刷時代

---

* 本稿は1992年4月21日に北海道大学言語文化部の研究会「メルジーネ」で発表した際の草稿に加筆したものである。質疑等で様々な示唆を与えて下さった方々に御礼申し上げたい。なお言うまでもなく，文責はすべて筆者にある。

1) Kornrumpf, Gisela: Strophik im Zeitalter der Prosa: Deutsche Heldendichtung im ausgehenden Mittelalter. In: Grenzmann, Ludger/Karl Stackmann (Hgg.): Literatur und Laienbildung im Spätmittelalter und in der Reformationszeit. Stuttgart 1984. S. 317f.

に入ってからどのような扱いを受けたのか。まず宮廷小説については，まったくと言ってよいほど成功例がない。印刷された作品自体『パルチヴァール』(1477年)等ごくわずかである。しかもその典拠は古いうえに難解だったため，既に初期新高ドイツ語時代に入っていた当時の人々にとり，そのままでは理解が困難だった。編者はテクストを改めて理解しやすくしようとしたのだが，その試みは失敗し(原典の誤読・おびただしい誤植)，逆に一層わかりずらいものになってしまった。このほか1260/70年頃に成立したアルブレヒトの『新ティトゥレル』(ただしこれは詩節形式)も印刷されたが(これも1477年)，やはり同様の経緯で失敗している。宮廷小説の当時の印刷本はこれらを含めてすべて初版で挫折しており，それ以上版を重ねたものは存在しない[2]。これに対してディートリヒらの活躍を扱う英雄文学はたいへんな人気を博し，たとえば様々な作品を集めた「英雄本」(‚Heldenbücher‘)が既に15世紀にシュトラースブルクやアウクスブルクで印刷され，16世紀以降もシュトラースブルク，アウクスブルク，フランクフルト，ハイデルベルク，バーゼルで多数出版されている。挿絵まで施されていることから，英雄本はこの時代の印刷本の中でもっとも人気のあったジャンルのひとつと考えられる[3]。さらに個々の作品毎の印刷例を見てもその人気のほどがうかがえる。『新ジゲノート』は宗教改革の前で8種，その後も11種が印刷されているし，『エッケの歌』も同様それぞれ4種，7種が確認されている。さらに『ラオリーン』や『怪物』も両者に匹敵する人気があったと認められ，これらの他にも数多くの作品が印刷本として存在している[4]。

このように中世後期，それも特に最末期になってから英雄文学が続々と筆写されたり印刷されたりしたのはなぜだろうか。その理由を考えるときひとつのヒントを与えてくれるのが，表題に掲げた「火を吐くディートリヒ」のモチーフなのである。まず具体例を挙げる。

そしてたちまちディートリヒは怪物を苦境に陥れた。

---

2) Koppitz, Hans Joachim: Studien zur Tradierung der weltlichen Epik im 15. und beginnenden 16. Jahrhundert. München 1980. S. 132-138.

3) ibd. S. 112, Anm. 41.

4) ibd. S. 113-123.

その口から真っ赤な炎がほとばしった。
ベルン殿(＝ディートリヒ)がひどく怒ったからである。
怪物はとても苦しくなった。熱さのあまりすっかり弱ってしまった。
(『怪物』　182節)[5]

ディートリヒ殿は怒り，炎を吐いた。
まるで煙を吐き，火に包まれた館のように。
ニーダーラントのジーフリトは，その不死身の皮膚がゆるんでしまった。
ディートリヒ殿は相手に血を流せとばかり剣を打ちまくった。
(『バラの園』D　531節)[6]

これらはどちらも主人公のディートリヒ・フォン・ベルンが敵との激戦の末，怒って炎を浴びせて決定的なダメージを与えるという場面である。筋立ての仔細に立ち入る余裕はないが，いずれの作品も，最後はディートリヒ(およびその一団)が勝利して平和と秩序が回復されることが特徴の「ディートリヒの冒険叙事詩」(aventiurehafte Dietrichepik)というジャンルに属するものである。このようにディートリヒが「火を吐く」場面は，例示した二作品のほかにも『エッケの歌』，や『ラオリーン』，『新ジゲノート』等で見られる[7]。そしてこれらの場面がいずれも作品の大きな山場に配されていることに注目

5) Dar nach in kurtzen stunden/bracht er wundrer in not. ym gieng vß seinem munde/ein flamm von feür so rot. do sich der von bernere/so gar erzürnet was. dem wundrer was so schwere/ vor hitz er kaum genaß. („Der Wunderer" Str. 182) In: Röhrich, Lutz (Hg.): Erzählungen des späten Mittelalters und ihr Weiterleben in Literatur und Volksdichtung bis zur Gegenwart. Bd. 2. Bern/München 1967.

6) Her Dietrîch wart erzürnet,　riechen er began,
als ein hûs, daz dâ dimpfet　und ist enzündet an.
Sîvride ûz Niderlande　wart sîn gehürne weich.
er gap im nâch dem bluote　vil manegen herten streich.
(„Der Rosengarten" D Str.531)　In: Holz, Georg (Hg.): Die Gedichte vom Rosengarten zu Worms.　Halle 1893. Nachdruck Tübingen 1982.

7) „Das Eckenlied" Mhd./Nhd.　Text, Übersetzung und Kommentar von Brévart, Francis B.　Stuttgart 1986. (RUB 8339) Str. 219.;　„Laurin" には様々な形態があるが，本稿ではAをとりあげる。„Laurin" A: Holz, Georg (Hg.): Laurin und der kleine

したい。ディートリヒの大活躍には聴衆の拍手や喝采がわき，読者たちからも満腔の共感が得られたに違いない。その意味でこの「火を吐くディートリヒ」のモチーフは，中世末期の英雄文学の人気とかなり密接に結びついていたと解してよい。

しかしながら善玉の主人公が火を吐く，というのは決して一般的，つまりよくあったと言えることではない。むしろ逆である。「火を吐く」という特質をもつのは『ベーオウルフ』の竜のように，一般には敵役・悪玉の方なのである。ではなぜ善玉のはずの主人公が火を吐くという性質を与えられたのだろうか。この点にもっとも簡潔な解答を出したのはイギリスの研究者ギレスピーである。彼はこの火を，「教会がディートリヒに与えた悪いイメージをくつがえす」ものとみなす[8]。後に述べるようにこの見解は正しい。しかしこうした悪魔的性質と（それ以外の点ではキリスト教の倫理から見ても）ほぼ完全な善玉の特徴がなぜひとりの人物に備わったのだろうか。後期中世当時の人々の関心・期待にそったからこそこのような場面が繰り返し描かれたのであり，これが受容者に満足感を与えたことは間違いあるまい。ではそれはどんな背景・事情によるのだろうか。本稿の眼目はこの「火」の起源にさかのぼることではないが，やはりこの問題を考えるためにはディートリヒのモデルである実在の人物，すなわち民族大移動期の東ゴート族の王テオドリック（456？—526 年）の実像と，彼が死後に教会側から受け続けた評価とをまず確認しておく必要がある。

2

テオドリックは 7 才の時から東ゴート族の許を離れてコンスタンティノープル，すなわち東ローマの宮廷で人質として生活していた。しかし人質とはいっても決して隷属扱いではなく，当時の皇帝レオの厚遇を得，文盲ではあっ

Rosengarten. Halle 1897. S. 1-50. ここでは v. 540f., 1204f., 1444ff.; „jüngerer Sigenot“ は次の版を使用。Howard, John A. (Ed.): Dietrich von Bern (1597). Würzburg 1986. Str. 82.

8）Gillespie, George T.: Probleme um die Dichtungen vom ‚Wunderer‘ oder ‚König Theoderichs Glück und Ende‘. In: Harms, Wolfgang/L. Peter Johnson (Hgg.): Deutsche Literatur des späten Mittelalters. Hamburger Colloquium. Berlin 1975. S. 105.

たが高い文化と教養を身につけたらしい。父王の死を受けて474年東ゴート王に即位したが,西ローマの秩序が乱れてついにこれが滅ぶにおよび,東ローマの皇帝ゼノンの命により部隊を率いて進撃し，戦いの末493年ついに簒奪者オドアケルをラヴェンナに討ってローマの平和を回復する。しかしテオドリックは自ら皇帝を名乗ったりはせず,あくまで王の地位にとどまっていた。その治政については当初からローマ人の諸権利をかなり尊重していたことを示す資料が多数残っており，城壁を修復したり橋を架けるなど善政を施していたことがうかがえる。ゴート族に特権を与えはしたが，人口比で圧倒的に少ない(ローマ人との割合はほぼ100対1か2)ため彼らは軍事と政務の一部に携わったのみで，ローマ旧来の元老院や官僚・統治組織は温存され，大土地所有者らの利益も相当守られていた。テオドリックを初めとする東ゴート族はもちろん，民族大移動を経験したゲルマン民族は(キリスト教徒とはいえ)ほとんどがアリウス派を信奉していたため,ローマ側から見れば異端だったのだが，テオドリックはカトリックを当初よく尊重していた。東ローマ皇帝の委託を受けていたこともあるが，彼はそれまでの「野蛮人の首領」たちとは明らかに違っていたのである。

ところが西暦520年を過ぎてテオドリックもいよいよ晩年にさしかかると事態は急変する。彼が宰相として登用した哲人政治家ボエティウスを反逆罪のかどで524年処刑し，アリウス信徒を強制的にカトリックへ改宗させようとした東ローマ皇帝ユスティヌスとの関係を修復するために派遣した教皇ヨハネス一世も帰任直後に獄につながれ，そこで死亡する。(526年5月18日)この間，それまで長きにわたって維持してきた秩序もついに乱れ始め，ローマ人大地主とゴート人支配層の対立やカトリック信徒への弾圧などで国内の緊張が一挙に高まっていた。そうした中でまもなく(526年8月30日)，テオドリックは急死する。原因の詳細は不明だが，カトリック側はこれを神罰と解釈した。そしてこれ以後教会の歴史書は，特に死の迫った獄中で『哲学の慰め』を著したボエティウスに殉教の理想を見，テオドリックの方は極悪非道の徒として伝えてゆく。

こうして(少なくとも教義のうえでは)テオドリックのDämonisierungが定着する。中世はそのあらゆる時期を通じて歴史への関心が高く，初めラテン語で，後にはドイツ語でも多くの史書が書かれたが，それらに出るテオドリック/ディートリヒはみな，末路がほぼ一定のパターンで語られる。たとえ

ばドイツ語で書かれた最初の本格的歴史書『皇帝年代記』はおおよそ次のように述べる。

① 庶出子ディートリヒはオドアケルを倒すためローマに入り，やがて秩序を回復するが，

② ボエティウス，ヨハネスらを死に至らしめる。

③ キリスト教徒みなこれを嘆き，神の罰が下る。すなわち，

④ 聖ヨハネスの命で悪魔がディートリヒを火山の中に連れ去り，彼はそこで最後の審判の日まで焼かれ続ける。[9]

『皇帝年代記』は12世紀半ばに成立し，これほどの分量(17000行以上)の書としては異例の人気を博して15世紀末まで多数の写本に書き継がれたものだが，ディートリヒに関する部分は，(テオドリックの死後まもなく書かれた大教皇グレゴリウスの『対話』(593年頃)など)先行する様々な歴史書にほぼ一貫して共通する記述を踏襲している。従って教会側がそのオーソドクスな解釈を『皇帝年代記』の通俗語の記述を通して ── おそらく貴族社会の上層部に ──広める意図を持っていたと見ることができる。この記述のうちここでもっとも重要なものは「火山に入れられて最後の審判の日まで焼かれる」というモチーフである。[10] なぜならこれまでの研究史が，この火山の「火」のイメージを12世紀に広まった「煉獄」(浄罪の炎)の概念と結びつけ，さらにこの火がディートリヒの吐く炎の起源であると説明してきたからである。たとえばシュナイダーは「ボエティウスを殺した異端アリウス派の徒と(彼を火山に導いた)悪魔との結びつきは教会側の憎悪の念から出たに違いない」と述べる。[11] そのうえで，悪魔に導かれて煉獄の火を浴びる最期はテオドリック/ディートリヒの出自それ自体までも悪魔によるという考え方を生じさせ，こ

---

9) „Kaiserchronik": Monumenta Germaniae Historica. Deutsche Chroniken. Bd. 1,1. Die Kaiserchronik eines Regensburger Geistlichen. Herausgegeben von Schröder, Edward. Hannover 1892. Nachdruck München 1984. v. 13993-14175 による。

10) ディートリヒの最期についてはこの他にも様々な伝承(「鹿を追うために乗った黒馬に連れ去られる」「侏儒に説得されて彼岸へ」「最後の審判の日までルーマニアで竜と戦う」等)があり，それらが文書や壁画等に現れているが，ここでは立ち入らない。

11) Schneider, Hermann: Germanische Heldensage. Bd.I,I: Deutsche Heldensage. Berlin 1928. 2. Auflage 1962. S. 279.

れが結果的に口から火を吐くという「悪魔的」性質をディートリヒがもつという記述を生むに至ったという見解を示した。[12] 実際，そうした記述が『シュトラースブルク英雄本』(1476/80 年)に見られる。それによると，「ディートリヒがまだ母親の胎内にいて父親が不在だったある夜，悪霊マホメットがやって来て彼女の側に身を横たえた。夫と寝ていたという夢からさめた彼女が手をのばすとそこに夫はなく，実体のない霊がいた。するとその霊は，心配せずともよい，汝の息は無双の霊となる，汝がこの夢を見たことで彼は怒ると火を吐くようになるのだ，と語った。」[13] テオドリックが 526 年まで生きたのに対しマホメットは 570 年頃生れた人物であるから，こうした記述は仮にその起源がいかに古いとしても，所詮二次的な所産であることは疑いない。とはいえ俗人たちの英雄を異教の創始者の血を引く者に仕立て上げている点に，オーソドクスな教条に基づく強い作為的介入が感じられる。

ここでディートリヒはなぜ火を吐いたのかという議論の出発点に戻ろう。彼に悪魔のイメージを与え(続け)たのは教会のドグマに忠実な人々である。彼らはディートリヒを火山に落とし，後にはその出自を(彼らが敵視し続けた)イスラム教に結びつける者も現れた。しかしギレスピーが指摘したように，その教会の攻撃をいわば逆手にとる者が現れた。煉獄の炎を口から吐く強力な武器に変えてしまったのである。先に引用した英雄本の記述は，これ

12) ibd. S. 281. これに対しピュッツは王家の人物と「火」の結びつきというモチーフは古くから存在し，必ずしもネガティヴでないどころかヨーロッパに広く見られることを指摘したうえで，異端起源の王が教会から悪魔的性格を与えられた時，その元来神的だった特徴(「火を吐く」)も悪魔の性質に変えられてしまったと考えている。(Pütz, Horst Peter: Studien zur Dietrichsage. Mythisierung und Dämonisierung Theoderichs des Großen. Wien 1969. (Diss.) S. 209-227) しかし起源はどうあれ，中世の教会はディートリヒの吐く火を煉獄と結びつけていたと考えてよい。

13) Als des berners muoter sein swanger ward da machet ein böser geist machmet sein gespenst. Eins nachtes da dietmar in der reiß was/da traumte ir wie sie bey irem man dietmar lege. da sie erwachet/da greiff sie neben sich/vnd greiff auff einen holen geist/da sprah der geist/du solt dich nit förchten ich bin ein gehürer geist. ich sag dir/der sun den du treist wirt der sterckest geist der ye geborn ward. Darumb das dir also getraumet ist/so würt feür auß seinem mund schiessen wann er zornig wirt/(„Straßburger Heldenbuch“ In: Heldenbuch. Nach dem ältesten Druck in Abbildung herausgegeben von Heinzle, Joachim. I Abbildungsband. Göppingen 1981. (Litterae 75/I). Bl. 3 v. 訳文は要約)

らをひとまとめにしたものである。好んで読まれた英雄本の中にこうしたくだりがあるという事実は，逆に当時の人々が教会の対ディートリヒ攻撃を意に介していなかったことを示唆する[14]ディートリヒに関する限り，教会の教えが巷間に徹底していなかったのは間違いない。それどころか俗人たちの「ディートリヒ熱」の前にその教えがたいして力をもたなかった，というのが実情だろう。俗界ばかりではない。中世の修道院や教会も実は決して教条一点張りの世界でなかったことは周知の事実である。俗人たちだけでなく，高位聖職者までディートリヒの伝説に熱を上げているさまを嘆く声が聞かれたのである。たとえばバンベルクの修道僧メインハルト(11 世紀)はその手紙の中で，彼の司教グンターが英雄歌謡ばかりにいそしみ，肝心のキリストの教えにまったく身を入れてないことを嘆いている。曰く，

> (……)ああ，司教の生活のなんと不幸で悲惨なことか！ ああ道徳は(どこへいったのか)！ 司教はアウグスティヌスやグレゴリウスに想いを馳せることなどまったくない。彼はいつもアッティラ，いつもアマルンク(＝ディートリヒ・フォン・ベルン)などの類の歌を自分で作ってばかりいる。(……)[15]

---

14) 古くは『ティードレクのサガ』(„Thidrekssaga“：1250 年頃)や『ラヴェンナの戦い』(„Rabenschlacht“：1270 年頃。最古の現存写本は 13 世紀末に成立しており，本稿で考察の対象とする諸作品の写本よりはるかに古い)もディートリヒの火を吐く場面が見られる。Vgl. Die Geschichte Thidreks von Bern. Übertragen von Erichsen, Fine. Jena 1924. Neuausgabe Düsseldorf/Köln 1967. (Thule 22) S. 412.; „Rabenschlacht“ In: Martin, Ernst (Hg.): Deutsches Heldenbuch. 2. Teil. Alpharts Tod, Dietrichs Flucht, Rabenschlacht. Berlin 1866. Nachdruck Dublin/Zürich 1967. Str. 973. これらについては時代・社会背景が異なるので稿を改めたい。

15) (……) o miseram et miserandam episcopi vitam, o mores! Numquam ille Augustinum, numquam ille Gregorium recolit, semper ille Attalam, semper Amalungum et cetera id genus poeta retractat. (……) In: Monumenta Germaniae Historica. Die Briefe der deutschen Kaiserzeit. Bd. 5. Briefsammlungen der Zeit Heinrichs IV. Bearbeitet von Erdmann, Carl/Norbert Fickermann. Weimar 1950. Nachdruck 1981 München. S. 121. なお引用文末尾の poeta retractat は，エアトマン(Erdmann, Carl: Gunther von Bamberg als Heldendichter. In: ZfdA 74, 1937. S. 116.)により，原文の portare tractat を改めたものである。

聖俗を問わず，ディートリヒの人気がいかに高かったかが十分うかがえる。こうした内容の記録文書が今日まで多数残っていることからも[16]当時の機運の一端が垣間見えたと考えてよかろう。そこで次に，中世末期の諸作品におけるディートリヒの人物像の特徴を概観する。「火を吐く」イメージを彼の全体像の中で位置づける必要があると考えられるからである。

3

ディートリヒが活躍する作品は，彼が火を吐く場面を含む上記の『怪物』，『バラの園』，『新ジゲノート』，『エッケの歌』，『ラオリーン』等のほかにも『オルトニート』，『ヴィルギナール』，『ヴォルフディートリヒ』等が数多く筆写された。15世紀だけをとってみても写本数はそれぞれ10，7，4ある。[17]ディートリヒの人気の高さが様々な奮戦譚を生む土壌として存在したことがなお一層うかがえるが，これらの「ディートリヒの冒険叙事詩」に登場する彼のイメージを考える前にひとつ確認しておかなければならないことがある。それは作品のいわゆる原初形態と現存テクストの関係の問題である。

ディートリヒの叙事詩については，今日「オリジナル」という概念を用いない。それは同一作品の現存諸テクストを比較した場合，単に字句だけでなく内容の変動がきわめて大きく，これらを系統立てて唯一のオリジナルへの道筋を想定することが困難だからである。今日に残るテクストの多くが，各作品それぞれの「もっとも古い形態」よりはるかに遅れて筆写ないし印刷されている。[18]書記伝承と並行して口頭伝承の存在したことが間違いなければ，現存テクストだけでなく今日もはや失われたものも，その成立の際には口承形態からも様々な刺激を受けて新たな書記形態が成立したと考えてよ

16) Grimm, Wilhelm: Die deutsche Heldensage. 4. Auflage. Unter Hinzufügung der Nachträge von Müllenhoff, Karl/Oskar Jänicke aus der Zeitschrift für Deutsches Altertum. Darmstadt 1957. が膨大な資料を収めているが，これ以後も数々の新資料が発見されている。

17) Koppitz (→2)), S. 114f.

18) その最古態の成立年代はほぼ次のように推定される：『エッケの歌』(13世紀前半)，『ラオリーン』(1250年頃)，『バラの園』(13世紀後半)，『ヴィルギナール』(同)，『ヴォルフディートリヒ』(13世紀)，『新ジゲノート』(1350年頃)，『怪物』(15世紀初め)等。Wisniewski, Roswitha: Mittelalterliche Dietrichdichtung. Stuttgart 1986. (SM 205)による。

い。[19] テクスト間の変異の大きさはこの点と Anonymität の二つの要素である程度納得がいく。(逆に書かれたテクストが口頭伝承に影響を与えた可能性もあろう)さらに英雄文学の書記伝承については,宮廷小説など他のジャンルの影響も無視できない。主にフランスから入った新しい文学がドイツのそれに大きな，そして多様な刺激を与えたことは強調するまでもないが，オーストリアでは宮廷小説に抵抗する，というかたちで英雄文学が活性化したらしい。[20] 独特の風土を持つ地域で，やがてドイツ語圏の各地に広まる書記伝承のきっかけが生じたのであろう。しかし新しいジャンルの影響はその後もポジティヴなかたちで続く。宮廷小説の登場人物が英雄文学に取り上げられることはごく稀にしかなかったが,活躍のモチーフなどは随所に影響が見られる。書かれたものに限ってみても，英雄文学のテクストはこのように絶えず様々な刺激を受けながら展開していったのである。[21] このように考えると，原初形態がたとえどんなに古いとしてもそこに「火を吐くディートリヒ」が登場したかどうかわからないうえに，考察の対象となる作品の現存テクストがほぼ15世紀以降に集中しているのだから，私たちはこれらを「後期中世末期の文学」と位置づけるべきである。そしてこの前提に立ったうえで諸作品をとりまく状況を考え，また当時の人々の関心・期待をテクストから読みとらなければならない。

では各作品に共通する，あるいは目立つディートリヒ像はどのようなものか。ほぼ以下のようになろう。

① どの作品でも一対一ではまず絶対に負けない。(唯一の例外は『新ジゲノート』で，ディートリヒは巨人ジゲノートに縛り上げられるが，家来の軍師ヒルデブラントに救われる)

---

19) ただしここで言う「口頭伝承」とはディートリヒらの活躍に関するものではあるが，文字文芸化されたものとそっくり同じ内容の口承形態の存在を想定しているのではない。

20) Vgl. Boor, Helmut de: Gesc hic hte der deutsc hen Literatur von den Anfängen bis zur Gegenwart. Bd. 2. 11. Auflage bearbeitet von Hennig, Ursula. Münc hen 1991. S. 143.

21) ハインツレは，これらのテクストがもはや「純粋な」英雄文学ではなく，多かれ少なかれ宮廷小説の影響によって成立した，それどころかこれらには heroisc he Vorstufen が存在しなかったと考えている。Heinzle, Joac him: Mittel hoc hdeutsc he Dietric hepik. Züric h/Münc hen 1978. (MTU 62). S. 264f.

② ディートリヒ自らが理由もなく相手に戦いを挑むことはない。逆に，

③ 相手から執拗な挑発を受けても，無益な戦いはするなと諫めてこれを思いとどまらせようと努力する。(『エッケの歌』に典型例が見られる)

④ しかし時に「臆病者」の印象を与える記述が見られる。たとえば『バラの園』Dでディートリヒは，どんな剣をもはねかえす皮膚をもつジーフリトとは「戦いたくない」と言い，ヒルデブラントにたしなめられる場面がある。[22]

⑤ ④と関連するが，挑発してきた敵とやむをえずに戦い，これを倒すと今度は逆に自責の念にかられて相手の死をひどく嘆き悲しむこともある。軽率に今日の価値観で判断することは控えるべきだが，往々にして「女々しい」という印象を与える。[23]

⑥ 宮廷小説の主人公と違い，理想(貴婦人へのミンネ，聖杯等)を追求する行動はとらない。Frauendienst のモチーフはあるが，あくまで危機に瀕した婦人を救うもので(たとえば『怪物』，『エッケの歌』)，ディートリヒ自身が結婚に至る，という場面はおろか，彼の婚姻そのものに関する記述もほとんどない。

さらにディートリヒを主人公とするどの作品にも(すなわち彼の「歴史叙事詩」にも)共通する点として，「神」の語がやたら頻繁に用いられていることを指摘しておきたい。危機に立った時，あるいは問題が無事解決した時はもちろん，通常の会話や地の文でも「神」，「マリア」や聖人の名などがたびたび現れる。「神の名をむやみに口にすべきではない」[24]という聖書の教えに反するのではないかと思われるほどである。ちなみに言語の面でも英雄文学の特徴がいたるところで目につく。まず helt, degen, recke, wîgant という「勇士」を意味する古くからの語彙がどの作品にも頻出する。しかも宮廷小説によく見られるような，これらの語を排して ritter が主要な語になるという傾

22) „Der Rosengarten“ D (→6)), Str. 470ff.

23) この④と⑤はともに 13 世紀後半に成立した『ベルンの書』(„Buch von Bern“ ── または『ディートリヒの敗走』(„Dietrichs Flucht“))と「ラヴェンナの戦い」という「ディートリヒの歴史叙事詩」(historische Dietrichepik)にも類似点がみられるほか，『ニーベルンゲンの歌』で最後のぎりぎりまで行動を控えるディートリヒにも共通する特徴である。

24) 『出エジプト記』20，7 および『申命記』5，11。

向はもちろん，その逆の傾向もディートリヒ叙事詩にはない。ritter の語は英雄文学にもよく見られるのである。さらに古くから口承で語る伝統があるため，その語りの「定型句」(Formel)が文章の構成手段として用いられている。そのため文章は比較的単純で，同一・類似表現の繰り返しが多い。しかし今日に残るディートリヒ文学の作品はすべて文字文化の所産であり，口承芸人の語りを直接筆写したものではない。[25] Formel の使用頻度がもっとも高い『ラオリーン』Aがよりによって(Strophe でなく)単なる脚韻詩行で書かれていることも，その有力な根拠のひとつである。[26]

ディートリヒの文学には，彼が火を吐くという点のほかに以上のような内的・形式的特徴がある。挙げたものだけを見てもかなり複雑な様相である。少なくともアルトゥース系の作品に登場する，(過ちは犯しても)「理想の騎士」への道をひたすら走る主人公のイメージとはいささか異なる。円卓の騎士たちとは正反対に教会の中枢から白眼視され続けたにもかかわらず，ディートリヒが後期中世の写本・印刷本で文字による息吹きを与えられて人口に膾炙したのはいったいどのような事情によるのか。

4

当時の人々の「関心」という面から考えてみたい。ディートリヒはあらゆる階層の人々の間でもっとも人気のある英雄だった。(それはジーフリトではない)既にふれたように高位聖職者にまでその歌にうつつをぬかす者がいたが，これは当時の教会組織を考えればなんら不思議なことではない。聖職者の主な供給源は騎士社会，すなわち俗界だったのである。たとえば貴族の家に生まれながら家督を継ぐことができない，あるいは財産分与にあずかることの困難な子が修道院に送られる。しかし彼らは英雄歌謡などの娯楽がある俗世間を自分の意志ですすんで捨てたのではない。だから附属の学舎での勉学に身が入らない者が出るのも当然である。また聖職者の人事に関しては世俗側の影響力が依然として強かったから，教会に入った人間も「出世」については元々の出自・家柄がやはりものを言う。こうした背景により，自分の

25) 註 21) を参照されたい。

26) Curschmann, Michael: Rezension zu Kühebacher, Egon (Hg.):Deutsche Heldenepik in Tirol. Bozen 1979. In: PBB 103, 1981. S. 318.

署名すらもできないのに高位に上る聖職者がどこの修道院でもあふれるような状態が続く。『カルミナ・ブラーナ』に歌われた聖職者の酒，愛の歓びと悩み，laudatio temporis acti などはその当時の修道院生活の実像を描ききったと言えるが，そうした状況は様々な教会改革運動にもかかわらず中世の末になっても基本的には変わることがなかったのである。まして俗人にとって，かつてローマを王として統治したディートリヒ/テオドリックは無双の英雄である。上は皇帝から下は単なる盾持ち・小姓や雑兵にいたるまで，またおそらく農民たちの間でも，ディートリヒは語り継がれたであろう。しばしば国内を顧みず，イタリア半島にばかり関心を向けていた歴代の神聖ローマ皇帝がいる。『アンブラス英雄本』の製作依頼者マクシミリアン一世(1459—1519年)に至っては，自分の墓の左右に理想の騎士としてディートリヒとアルトゥースの像を配置させたほどである。

はたして，15 世紀になると教条的な「ディートリヒ＝悪魔」というテーゼに反発する姿勢が英雄文学とは異なるジャンルの作品に現れる。『ヴァルトブルクの歌合戦』の一部を含む写本 k (＝『コルマー歌謡写本』：1460 年頃)に以下の記述が挿入されている。(170—173 節)

> (……)侏儒王ラオリーンがディートリヒに言う：「あなたは現世ではあとせいぜい 50 年しか生きられない。いかに強かったとはいえ，やはり死は迎えに来るのです。だがしかと申し上げますが，私の兄弟があなたに 1000 年の災いなき命をさしあげます。あなたの大きな栄誉といつも示された寛大さのゆえです。また決して徳をお忘れになることもありませんでした。」
>
> ディートリヒ：「それはどういうことか。これから 1000 年も続く命をくれるとは。信じられるよう証しを見せてくれ，はっきり教えてほしい。」ラオリーン：「殿，心配なさるな。金，薬草，宝石その他の富が 1000 年後まで豊かに生きられるようにしてくれます。さあ私の申すようになさって下さい。火を吹く山を作らせて下さい。急ぎましょう。その山のすぐそばにはよく踏みならされた道が通るのです。これで皆，私たちが熱い火山の中(で死んだ)と思うでしょう。しかし誓って申しますが，私たちは行った先で現世の神々に等しい生活を送るのです。」

ディートリヒ：「火を吹く山とはいったい何か。そんなものは聞いたことがない。」ラオリーン：「では私の口から申します。人はみな，私たちのことをあちこちで罵っており，口々に誰がディートリヒを神扱いしはじめたのか？と言っているのです。しかし今申したようにすればすぐに楽になります。そして皆も私たちが地獄の底に向かったと思うでしょう，なんと彼らにとって喜ばしい事態になったことかと。しかし悲しむ必要はありません。彼の地で私たちはひとつの悲しみのかわりに一千もの喜びを得るでしょう。」ディートリヒ：「そういうことならば，そうしよう。喜ばしいことだ。だがこのことは誰にも言わずにおこう。」

たちまちのうちに火を吹く山が作られ，火の粉とともに塵雲が夜空に広がった。ディートリヒはこう言ったのだった：「私は彼の地に向かうぞ，先に言った通りにする。」彼らを導き，火山を抜ける一本の道がその目の前に現れた。これは本当のことです。こうしてディートリヒは実り多き生を得，これが一千年続くのです。(……)[27]

---

27) (Str.170) (……) Laurîn der künic (……) sprach: ‚(……) Ir hânt niht mê zuo lebenne hie dan noch wol funfzig jâr:/wie stark ir sît gewesen ie, sô nimt iuch doch der tôt./ich wil iu sagen offenbar,/mîn bruoder gît iu tûsent jâr zuo lebenne sunder nôt.//daz tuot er umbe iwer wirde grôz,/umb iwer zuht,/der iuch nie verdrôz:/ir hâtent iemer zuo den tugenden fluht.‘//(Str.171) Der Berner sprach: ‚Wie mac daz sîn?/wilt du mir hie ein leben schicken fürbaz tûsent jâr?/daz lâz an mir mit zeichen werden schîn,/und tuo ez offenbar.‘//‚Her, ir sult âne angest wesen:/golt, kriuter unde edel steine und ander rîcheit vil,/die schaffent, daz ir mugent wol genesen/gein tûsent jâre zil.‘//‚Nu folget mir und tuot daz ich iu herre heize nuo:/lât iu bereiten einen berc, der innen viuric sî./und lânt uns balde grîfen zuo;/ein wol gebente strâze guot gar nâhe stât dâbî.‘//‚sô meinent al die liute, wir sîn gevarn/in hitze grôz;/ich wilz bewarn:/wir werden dort irdischer göte gnôz.‘//(Str.172) ‚Waz solt uns nu ein fiurîn berc?‘/sprach der von Berne unverzeit: ‚dâ von ist mir niht kunt.‘/dô antwurt ime Laurîn daz getwerc:/‚daz rihtet iu mîn munt.‘//‚Die liute hânt es wan ir spot,/wir wæren beide hie und dort, daz wizzent endelîch./si sprechent alle: wer gab iu den got?/sus wirt ez wol gelîch.‘//‚So wænent si, wir sîn in ein abgründe tief gevarn,/wie gar ein gemelîche sache sî mit uns getân./gar allez trûren suln wir sparn,/wol tûsent freuden suln wir dort für eine sorge hân.‘//der Berner sprach:‚ist nu diu sache alsô,/ez muoz geschehen./ich bin es vrô;/mîn munt daz nimmer menschen sol verjehen.‘//(Str.173) Wie schiere

これが先の『皇帝年代記』に見た「ディートリヒの最期(の教え)」に対する反発であることは間違いない。すなわちこの頃には教会のオーソドクスな教えに公然と異を唱える人物がいた。そしてそれを許容する風土が少なくとも芽生えていたのである。さもなければこのような記述が(紙製とはいえ)大部の写本に載ることは考えられない。

ディートリヒらを中心とする英雄文学が特にオーストリアで盛んだったことは既にふれた。この一帯には，ミンネザングでもデア・フォン・キューレンベルクのように独特の作風の詩人が出るなどして「ドナウ派」[28] と呼ばれる固有の伝統があった。今日に残る英雄文学作品も，多くはその起源をこの地域にもつと考えられている。しかしだからといって，そのほかの地域が「不活発」だったわけではない。たとえばテューリンゲン伯ヘルマンの宮廷は，オーストリアやバイエルンとは異なる性質の作品が数々生まれた所としてしばしば文学史に挙げられる。しかしながらこの「気風」は実際にはヘルマン個人によるところが大きく，その地全体の「文化」とは呼び難い。彼自身の死(1217 年)により，その宮廷にいた文芸の担い手たちはたちまち四散してしまった。後継者(息子！)が関心を持ち合わせていなかったからである。そのヘルマンの宮廷でも活躍していたフェルデケやヴォルフラムの作品に，ディートリヒ関係の素材(剣・戦いなど)が引用されていることに逆に注目したい。[29] 初めてドイツ語でもたらされる新しい作品の主人公らがどんな武具

---

der berc bereitet wart,/mit fiures funken manec gestüppe, diu man nahtes sach:/ der Berner sprach: ‚Ich wil hin ûf die vart/als ich mich ê verjach.'//Ein strâze al ûf der vart vor in/hin durch den berc gemachet wart als ich bescheiden wil./sus hât er doch ein leben nâch gewin/gein tûsent jâre zil. (……) In: Simrock, Karl (Hg.): Der Wartburgkrieg. Stuttgart/Augsburg 1858. (訳文は一部省略。なお原文に欠けている引用符を補った箇所がある。また紙幅の都合で改行は最少限にとどめた)

28) 1991 年度日本独文学会秋季研究発表会(於名古屋大学)のシンポジウム「中世期におけるフランス文学の受容」での伊東泰治氏の発表(『フランス詩の受容』)による。

29) フェルデケはディートリヒ，ヴィテゲ，ハイメそれぞれの剣エッケザス，ミミンク，ナーゲルリンクに加え，ローラント，オリヴィエの剣ドゥレンダルト，アルテクレーレを『エーネアース』に引用し(Heinrich von Veldeke: Eneasroman. Mhd./Nhd. Nach dem Text von Ettmüller, Ludwig, ins Nhd. übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Kartschoke, Dieter. Stuttgart 1986. v. 5726-5731.)，ヴォルフラムは『ヴィレハルム』で，「アリシャンツの野戦はエッツェルやエルメンリヒの行った戦いよりも激しい」と述べる(Wolfram von Eschenbach: Wille-

を身につけていかに雄々しく戦ったかをわかりやすく説明するため，詩人たちは聴衆に既知の素材を利用した。つまりテューリンゲンの宮廷でもディートリヒらの活躍が既に語られていなければ，こうした引用はありえないのである。[30] しかもフェルデケは彼が引用した剣の所有者(ディートリヒたち)の名は一切挙げていない。その必要がない常識だったからである。それほどに英雄たちにまつわる口承文芸は盛んだった。英雄文学が当初かなりの間写本に載らなかったのは，(教会の反発などよりむしろ)このジャンルの特徴として口頭で朗ぜられる性質のものだったからである。(その意味で『ニーベルンゲンの歌』は巨大な例外である)

一方 14 世紀にはドイツでも紙の使用が始まり，15 世紀になると印刷も始まる。これがとりわけ都市部で文字文化の普及を促すことになる。後期中世にはドイツでもケルン，ニュルンベルク，アウクスブルク，ウルム，ヴュルツブルクなど人口が 10000 を越える都市が各地に成立していた。それまで筆写本の製作工房が主に(しばしば地方にある)大修道院にあったのに対し，初期の印刷工房はこれらの大都市にできた。しかも都市の空気は「自由」である。経済力をもつ商人らと都市貴族 —— これはかつてミニステリアーレ程度だった者が少なくない —— の交流は頻繁だった。彼らの子女が婚姻で結びついたことも稀ではない。また都市貴族は生活水準が上がると，(かつて自分たちの祖先が仕えていた)地方の有力貴族の風俗・習慣をまねるようになる。たとえば以前は実戦に備える訓練でもあった馬上槍試合が完全な遊戯と化す。貴族だけでなく財力のある商人もこれを催すようになる。また人々の歴史への関心は依然として高かった。この当時の人々にとって英雄文学は Vorzeitkunde でもあったと考えられる所以である。さらに商業活動の活発化とそれにともなう学校の設立などで識字率が上昇し始める。都市で文字文学が普及

---

halm. Text der Ausgabe von Schröder, Werner. Völlig neubearbeitete Übersetzung, Vorwort und Register von Kartschoke, Dieter. Berlin/New York 1989. 384, 18-22.)。

30) フェルデケがヘルマンの宮廷に移った時，既に『エーネアース』の約 5 分の 4 が完成していた。(Bumke, Joachim: Geschichte der deutschen Literatur im hohen Mittelalter. München 1990. (dtv 4552) S. 139.)先の引用箇所もそこに含まれているが，ヘルマンたちがこれらの剣の名を理解しなかったと仮定するのはむしろ不自然である。

する条件はかなり揃ったと言える。はたしてそこでもっとも大きな人気を得たジャンル――少なくともそのひとつ[31]――がディートリヒ叙事詩だった。[32] その諸作品で彼が火を吐いている。この点だけなら当時の人々にとっても，やはり「悪魔的」と映ったであろう。教会のプロパガンダが効を奏したかどうかは不明だが，ともかくこのイメージは古くから語り継がれて，この時代既に一定の地歩を得ていたかもしれない。だとするとこれだけが目立っては「ヒーロー」のイメージを損なうため作品化できない。だから何らかの埋め合わせが必要となる。そこで作者たちは既にふれたように「神」に関する語を作品内にちりばめて，キリスト教の教義といわば妥協をはかったのである。[33] それどころか『怪物』には次のようなくだりがある。(129節)

> 神によってもたらされた恵みを乙女は彼(＝ディートリヒ)の上にたれた。
> その敬虔さゆえに，乙女に神はそのような力を与えていたのである。
> これは彼の体にとどまり，離れることはなかった。
> 彼(の命)を神がしばしば守った，と書かれているように。[34]

火を吐くディートリヒは，神に守られる存在に高められてしまった。これだけならいわばディートリヒの権威づけ，ないしはキリスト教化である。とこ

---

31) 英雄文学以外では，歴史上実在の人物や事実に関するものが好まれた。たとえばトロヤ，アレクサンダーを主題とするものも英雄文学に劣らず人気があった。これと反対にアルトゥース系列の作品は，冒頭で述べた通り人気が衰えていった。

32) 「印刷物はその初期においては，手写本の安価な代用品(……)であった」(エリク・ド・グロリエ：『書物の歴史』大塚幸男訳　東京(白水社) 1992. S. 77.) としても，財力をもって手写本を購った人々がこれらの印刷本を手にしなかったと断じられる証拠はない。

33) 同じ現象が『ニーベルンゲンの歌』にも見られ，「神」等の語が頻出するほど内容の「非キリスト性」が却って目につく。(Vgl. Hoffmann, Werner: Die spätmittelalterliche Bearbeitung des Nibelungenliedes in Lienhart Scheubels Heldenbuch. GRM 29, 1979. S. 135f.) こうした現象はドイツ以外でもみられることから，キリスト教と民間伝承文芸が接触した時どこでも起きた一種の妥協策と考えられる。

34) Do thet sie jm ein segen/der ir von gott was kunt/vonn jrer frümkeit wegen/gab ir gott sölichen funt/das was an jm beliben/vnd an jm wol bewert/als man es fyndt geschriben/das yn gott offt ernert. („Der Wunderer" (→5)), Str. 129)

ろがさらに『新ジゲノート』の 81—82 節では,

> (……)すると巨人はひどく汗をかきだした。これはディートリヒ殿がその口から発して彼を襲った熱によるのだった。
>
> すると巨人は言った:「汝がもうしばらくここにいたら,汝はその口から吐く炎で私を焼いてしまうだろう。いったい誰が汝の中にこんな力を引き入れたのだろうか。汝の中に悪魔がその家来たちをつれて入ったとしか思えぬ。私にとりついて苦しめるのは汝の太刀づかいよりも,勇士よ,汝が吐く炎の熱だ。それでこの堅い皮膚がゆるんでしまうとはな。」巨人の口から出たことばにベルン殿はたいそう怒った。[35]

と記され,ディートリヒの Dämonisierung に対する反発の姿勢がはっきり読みとれる。都市の市民を中心とする新しい受容者たち,あるいは新しい文化の享受者たちも,やはり教会の厳格な教条にしばられはしなかったのである。騎士社会が成熟しつつあった中世盛期に数多く生まれた,理想の騎士像を追求してこれを称揚する文学に対する関心を,中世末期の人々は次第に失っていった。しかし彼らが新しい社会の中で独自の価値観を持ち,自らの嗜好に合う新しい文学を追い求めるようになったととらえるのは必ずしも正確ではない。また英雄文学が「復活」したのでもない。古くから脈々と生き続けてきた伝統的な素材に,彼らは文字という手段でいわば新しい命を与えたのである。[36]

さらに彼らは既成の文学のジャンルの枠を越えて,中高ドイツ語文学の古

---

35) (Str. 81) (……) do begunt der ris so freissam./den seinen schweiss ach reren./von der hitz die in da besach./die her d ditreich von bern/von seinen mund aus sprach: (Str. 82) da sprach der ungefüge man./soltu ein weil sein in dem plan./do werst mich ver brennen./pon feuer *d*as aus deinem munt gat./weis nit wers i*n* dich getragen hat./ich kan nit anders kennen./wenn das der teuvel in dich sei./mit allen seinen knechten./dein hitz die wont mit nah*e* bei./denn held dein grosses fechten./da mit weichstu mir mein horn./die red die tet dem berner./von dem risen gar zorn: („jüngerer Sigenot" (→7)).「ベルンの調べ」(Berner Ton)に従って原文に句切りを入れたが訳文は句切らない。編者の提案に従って字句を改めた部分(斜字体)がある)

36)「古典期」の作品も決してすべての人気が衰えたわけではない。15 世紀から 16 世紀初

典期には考えられなかったような特徴をもつ文学を生み出した。かつて古典期では，たとえば「英雄文学」とフランスの「武勲詩」(chanson de geste)の要素がそのどちらともジャンルの異なる作品の中でいっしょに引用される，あるいは両系統の作品そのものがひとつの写本に共存するという例はごくわずかしかなかった。『ヘルムブレヒト』の帽子(ディートリヒの弟ディートヘアらと，カール，ローラント，オリヴィエ，テュルピンが現れる[37])とザンクト・ガレン修道院所蔵のCodex 857(『ニーベルンゲンの歌』B，デア・シュトリッカーの『カール大帝』およびヴォルフラムの『ヴィレハルム』等を収める)に;[38] 先に挙げたフェルデケの『エーネアース』(ディートリヒやローラントらの剣が引用され，主人公の剣はそれらに優ると紹介される[39])くらいである。古典期ではこれらのジャンルがまだ峻別されていたのである。しかし中世も末期に近づくと，こうした垣根は低くなってゆく。たとえばハインリヒ・ヴィッテンヴィーラーの『指輪』(1410年頃)[40] ではディートリヒ，ヒルデブラント，ラオリーンらとローラントが，単なる名前の引用でなく堂々と登場して活躍している。またヘルマン・フォン・ザクセンハイムの『モール人の女』(1450年代)[41] でもその女の名(ブリュンヒルト)など，先の両ジャンルから多数の引用がなされている。

15世紀に入った頃から，このように英雄文学に限らず様々な素材を同一作品内に盛り込む傾向が現れる。『指輪』や『モール人の女』でもアルトゥース系の騎士やギリシャ・ローマ神話系の人物のほか，オリエントのモチーフな

めにかけて，『イーヴァイン』やデア・シュトリッカーの『カール大帝』はそれぞれ約10の写本がつくられた。(Koppitz (→2)), S. 126-131.) しかしこれらがいずれも印刷されていないという事実は，印刷も筆写も多数されたディートリヒ叙事詩との大きな違いである。

37) Wernher der Gartenære: Helmbrecht. Herausgegeben von Panzer, Friedrich. 9., neubearbeitete Auflage besorgt von Ruh, Kurt. Tübingen 1974. v. 62-71, 76-81.

38) この二例については既にKornrumpf ((→1)), S. 319.) が指摘している。

39) 註30) を参照されたい。

40) Heinrich Wittenwiler: Der Ring. Frühnhd./Nhd. Nach dem Text von Wießner, Edmund, ins Nhd. übersetzt und herausgegeben von Brunner, Horst. Stuttgart 1991. (RUB 8749)なおここに登場する魔女ヘッヒェルの狼は「熱気」を吐く(v. 8831ff.)。中世のヨーロッパでは，狼はしばしば悪魔の化身と考えられていた。

41) Hermann von Sachsenheim: Die Mörin. Nach der Wiener Handschrift ÖNB 2946 herausgegeben und kommentiert von Schlosser, Horst Dieter. Wiesbaden 1974.

どが貪欲なまでに取り入れられた。(「異国への旅」も大航海時代の当時は非常に人気のあるテーマだった)そしてこうした作品が続々と現れる。様々な素材を作りなおし，かつそれらを組み合わせて筋を構成してゆく傾向がしだいに顕著になってゆく。この時代にはパルチヴァールが戦いに敗れるという作品も写本に載ったのである。[42] キリスト教のディートリヒを白眼視する姿勢[43] (これもひょっとすると口頭伝承化されていたかもしれない)もそれに反発する姿勢も，当時のこのような機運，言い換えれば人々の多方面への関心を背景にしたいわば素材収集欲とでもいうべき力によって引き寄せられ，統合されたのである。

「火を吐くディートリヒ」のモチーフもこうした状況を前提とすれば，決して理解し難いものではない。繰り返すが，教会がその「浄罪」のためにディートリヒに浴びせかけた炎が逆に彼の口から出る強力な武器に変えられてしまった背景には，(後期中世に関する限り)①文字文化の普及，②ディートリヒの根強い人気に基づく人々の関心(「今度はどんな活躍をするか」という期待)，そして③素材収集欲があった。教会の攻撃を逆手にとる者が現れたのはまさにこれらの要素が出会った結果なのであり，だからこそ大きな広まりを見たのである。なおこの現象には，既にふれた(中高ドイツ語から初期新高ドイツ語への)言語の変化も間接的ながら関与したと思われる。古典期のいわゆる「質の高い」作品のテクストが往々にして難解だったのに対し，口承文芸の定型句を文体構成手段とした英雄文学は，まさにそれゆえに困難なく言語の変化を乗り越えたのである。中高ドイツ語で「書かれた」テクストをその新しい版の典拠とした場合でも，(改)作者たちはさしたる困難なく原典を理解したに違いない。Formel を構成するのは常にその時々の通用語である。逆に擬古的な単語や文体が用いられた場合，それは「古さ」に価値を認めて失われつつあるものを保存しようとする姿勢の現れである。口承文芸が盛んだった間は，時代の変遷につれて言語が変化しても，その定型句は常に「生

---

42) 『アンテラン』(Scherer, Wilhelm (Hg.): Antelan. In: ZfdA 15, 1872. S. 140-149.) シェーラーはこの作品の起源を 13 世紀末と考えているが，少なくとも現存形態の成立はもっと後と思われる。なお写本は 1480—90 年頃成立。

43) この姿勢は宗教改革後も衰えることがなかった。ルターも，自分の説教を聞いてもらうためにまずディートリヒの名を口にしなければならないとこぼしている。(Grimm (→16)), S. 348 を参照)

きた」言語から成っていた。つまり Formel 自体も変化していたのである。「英雄文学」は後期中世の人々にとっては(Vorzeitkunde ではあっても)決して過去の苔むした遺産ではなかった。先に挙げた helt など「勇士」を表す語も必ずしも archaisch ではなく,作品外の世界,すなわち当時の現実の社会にもまだ根をおろしていたに違いない。

古典期の文学にはたしかに今日まで十分生き残るだけの高い「文学的価値」を持つ作品がある。これに対して後期中世の文学,特にディートリヒ・フォン・ベルンを中心とする文学は「数の上では沢山の作品が生み出されていく。しかし,質においてはいずれもこの二篇(=『ニーベルンゲンの歌』と『クードルーン』)に遠くおよばぬものばかりであった」[44] と言われてもある意味ではしかたがないほど筋立てが類型的,かつまた単調に見える。まして主人公が火を吐く姿など,今日の価値観に照らすと奇怪に映るかもしれない。しかしながらこれらの作品がさかんに書写されたり印刷された当時は,言うまでもなく今日とは異なった社会規範や価値観があったのである。現代の尺度で作品の「価値」を決めるべきではない。あえて現代との共通点を指摘するなら,同一人物の同じようなパターンの活躍を描く作品が繰り返して作られるという「状況」である。ディートリヒの活躍する作品群は,今ならシリーズとか競作と呼ばれる類のものである。このジャンルは,今日一応「文学」の枠内におさめられてはいるが,当時の人々にとっては「文芸」,すなわち「芸能」のひとつだったととらえる方が理解しやすい。本稿の冒頭では後期中世を「英雄文学の時代」と呼んだが,むしろ「英雄文芸に新たな息吹が与えられた時代」とする方が実態により即している。いみじくもホフマンがシュヴィーテリンクのディートリヒ叙事詩についての判断を批判して述べたように,「質の劣る作品」(?)とても十分に研究対象となるのであり,文芸活動の実態を知るうえでは,もしかするとその時代のごく少数の大作よりも却ってこれらの方がはるかに示唆に富んでいるかもしれない[45] ということを,私たちは忘れてはならないのである。

---

44) 藤本淳雄/岩村行雄/神品芳夫/高辻知義/石井不二雄/吉島茂:『ドイツ文学史』 東京(東京大学出版会) 1977. S. 17.

45) Hoffmann, Werner: Mittelhochdeutsche Heldendichtung. Berlin 1974. (Grundlagen der Germanistik 14) S. 171.

Dietrich von Bern als Feuerspeier im Spätmittelalter

Tatsuo Terada

Dietrich von Bern war im ganzen Mittelalter einer der beliebtesten Helden der deutschen Literatur. Es gibt aber einen merkwürdigen Zug in den spätmittelalterlichen Textrealisierungen der aventiurehaften Dietrichepik: Dietrich speit Feuer und versetzt so seinem Feind einen entscheidenden Schlag. („Eckenlied", „jüngerer Sigenot", „Laurin", „Rosengarten", „Wunderer" usw.) Der auffallende Feueratem wird forschungsgeschichtlich mit dem Fegefeuer verbunden, dem Theoderich, arianischer Ketzerkönig und Dietrichs historisches Vorbild, bis zum jüngsten Tag ausgesetzt werden soll. Der Kirchenlehre nach findet Theoderich nämlich ein dämonisches Ende und stürzt in den Vulkan. Aber diese Dämonisierung rief dann eine Gegenreaktion hervor. Wir wissen schon, daß man im interpolierten „Wartburgkrieg"-Teil der Kolmarer Liederhandschrift dieses Ende ins Gegenteil verkehrte: Dietrich soll danach nicht in alle Ewigkeit bestraft werden, sondern er gewinnt ein tausendjähriges Leben. Derartige Umstände lassen sich auch bei der Entdämonisierung seines Feueratems vermuten, der ebenso auf Dietrichs dämonisierte Geburt hinweist. Geklärt ist aber noch nicht, wie sich dieses Motiv gerade im Spätmittelalter so weit verbreitete.

Dazu läßt sich einiges sagen. Die Abenteuer von Dietrich wurden damals noch im Alltagsleben weiter besungen. Auch die Kirchenlehre konnte das nicht ändern. Vielmehr sprechen bittere Erwähnungen zu Dietrich in den ‚autoritären' Schriften sogar für seine allgemeine Popularität. Das Spätmittelalter war außerdem ein Zeitalter, in dem eine neue Schriftkultur in Gang kam. Papier und Druckwesen förderten die Entwicklung des Handelsverkehrs, Großstädte entstanden und wurden dann zum Buchmarkt. Parallel dazu begann das Analphabetentum langsam abzunehmen. Mit den Stoffen um Dietrich konnte man also Erfolg auf dem Markt erwarten und fand ihn auch: Das neue Publikum hatte großes Interesse an Dietrichs Abenteuern als ‚Vorzeitkunde' und erwartete immer wieder eine neue Geschichte. Dazu kam noch ein gewisser Sammeleifer unter den Lesern und Zuhörern. Dies alles veranlaßte die Verfasser und/oder Bearbeiter dazu, recht unterschiedliche Stoffe zu integrieren und so neue Handlungen zu gestalten. Im Zug dieser Entwicklung wurde das von der Kirche propagierte dämonische Bild Dietrichs mit seinem positiven Gegenbild zusammen verarbeitet und dann zur Figur mit Feueratem als starker Waffe verschmolzen.

Für die schriftliche Überlieferung und Verbreitung der Stoffe um Dietrich spielte es vielleicht auch eine indirekte Rolle, daß dabei die Formeln der mündlich tradierten Dichtung als Stilmittel Verwendung fanden. Die Drucker frühneuhochdeutscher Zeit etwa mußten die Texte höfischer Romane mit dem für sie schwierigen Stil entziffern

und konnten vieles oft doch nicht verstehen und balhornisierten so den Text. Die Drucke höfischer Romane („Parzival", „Jüngerer Titurel" usw.) hatten keinen Erfolg, während die Dietrichepen von hoher Formeldichte überall weitergedruckt wurden.